

「復興教育」の実践と課題—阪神・淡路大震災と HAT 神戸

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科
教授 阪本真由美



1. はじめに

本論は、震災からの復興に関する教育（以下「復興教育」とする）を学校教育にどのように位置づけるのか、防災教育と復興教育の接点や相違点を、阪神・淡路大震災以降の復興教育の事例分析から明らかにすることを目的としている。

防災教育は、文部科学省による『『生きる力』を育む防災教育の展開』¹⁾にみられるように、災害からの安全を確保するための知識・思考・判断を育むことに焦点を当てた内容が中心となっている。一方で、復興教育をどのように防災教育に位置づけ、カリキュラム化するのかという議論は十分ではない。

復興教育の柱の一つとして挙げられるのが、災害の記憶継承をテーマとした震災学習である。阪神・淡路大震災（1995 年）で被害を受けた神戸市は、地震から半年後の 1995 年 6 月に「神戸市教育懇話会」を設置し、中長期的に学校教育において取り組むべき内容を検討した²⁾。そして、震災の辛い経験とそれを乗り越える過程で学んだ教訓を活かし、未来に向けて「生きる力」を育む教育を進める方針を定めた。それを教科教育にあわせて推進するために、1995 年 11 月に防災教育副読本「しあわせ はこぼう」（小学校 1・2・3 年生用、小学校 4・5・6 年生用）「幸せ 運ぼう」（中学生用）を刊行した。

同様に、兵庫県教育委員会は防災教育副読本「明日に生きる」（小学校低学年・高学年用、中学生用）を 1997 年に刊行するとともに、震災のあった 1 月 17 日前後には、震災の記憶を伝えることに加え、幅広く防災教育を行うという方針を定めた。兵庫県教

育委員会による調査（令和 6 年度）では、「副読本を年間計画に位置付けている」「1.17 に関連する行事を実施している」との回答は 100%となっている。しかし、震災から 30 年が経過し、児童生徒だけでなく教員・保護者も震災を知らない人が増え、震災を軸とした教育の展開が難しくなっている³⁾。

2. 復興教育に関する研究

（1）復興教育の構築にむけて

ここでは復興教育として、どのような取り組みが行われてきたのか先行研究をみってみる。東日本大震災（2011 年）後に、文部科学省は被災地の復興とともに、「未来に向かって前進していけるようにするための教育」を復興教育と位置づけ、被災地で行われる特色ある教育事業の支援を行なった⁴⁾。

こうした動きは、従来の防災教育とは異なる実践を生み出しており、その一つが岩手県による「いわての復興教育」である。これは、郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、「いきる」「かかわる」「そなえる」という、地震津波の教訓から得た価値を育むことを目標とした取り組みであった。岩手県教育委員会は、2014 年 5 月に副読本「いきる かかわる そなえる」（小学校低学年用、小学校高学年用、中学校用）⁴⁾や教員向けのプログラム⁵⁾を整備した。

前述の神戸市教育委員会や兵庫県教育委員会による副読本が、震災を中心とする内容であるのに対し、ここでは地域の自然、産業、歴史等の幅広い内容が扱われるというように、復興教育は防災教育の

延長線上ではなく、「暮らし」「まち」「人のつながり」の関係から学びを得るものとして構成された。

東日本大震災から10年が経過した時点で行われた調査⁶⁾では、岩手県全域で「いわての復興教育」が実施された一方で、地震津波の被害が大きかった沿岸部と内陸部とでは取り組み状況が異なることや、「そなえる」への比重が相対的に大きいことが明らかになった。また、震災直後は児童生徒が自らの経験に基づき学びを深めることができたものの、時間の経過とともに震災経験のない児童・生徒が増えており、そのような変化を踏まえた教育の場づくりが必要であることが指摘された。記憶の風化が震災学習の継続に影響を及ぼしている点は、阪神・淡路大震災の被災地とも共通した課題である⁷⁾。

(2) 記憶の風化と教育

以上に述べたように、復興教育では震災の記憶継承が重視される一方で、時間の経過とともにその継続が難しくなっている。なぜなら、物理現象としての災害は一過性の出来事であり、時間の経過とともに記憶が徐々に薄れるためである。

災害の記憶を伝えるために、被災地では、被害の物理的な痕跡(建物・モノ資料・断層等)、被害を刻む慰霊碑/記念碑、ミュージアム、年中行事、暦、体験者の語り、資料などの多様な物質/非物質的な「場」を保存するという取り組みが行われてきた。けれども、「場」を保存するだけでは記憶の継承は難しい。

過去に起きた出来事の記憶に着目した社会学者のノラは、記憶の継承を想起との関係から捉えている。記憶を想起させる場を「記憶の場(lieux de memoire)」として、それらが記憶の場として成立するには、「物質的」「象徴的」「機能的」という3側面が共存しなければならないと論じている⁸⁾。

教育学者の山名は、記憶の教育の場には「学校」「ミュージアム」「都市」があり、これらを「想起のアーキテクチャ」と位置づけている。そして、記憶はこれらの「場」とそこを訪れる人々のふるまい(読む/祈る/歩く/目をむける)というコミュニケー

ションにより、想起・継承されると述べている⁹⁾。

阪神・淡路大震災や東日本大震災の被災地は依然として復興過程にある。地震津波の物理的な痕跡は見えにくくなっているとはいえ、原体験として災害の記憶を持つ人々は数多くいる。つまり、失われつつあるのは「被害の記憶」であり、「復興の記憶」は存在する。したがって、「復興の記憶の場」にどのようなものがあるのかを明らかにし、それを教育コンテンツとすることができれば、継続した震災学習が可能になるのではないかと考えた。その事例として、次章では阪神・淡路大震災の復興過程で整備された都市空間を取り上げ、それが「復興の記憶の場」として機能し得るのか学習実践から検討する。

3. 復興教育の場としての都市空間

(1) 震災後につくられた都市 HAT 神戸

阪神・淡路大震災の復興過程では、再開発や区画整理等により新たな都市空間が整備された。その一つが神戸市中央区・灘区臨海部に新たに整備された HAT(Happy Active Town)神戸である(図1)¹⁰⁾。

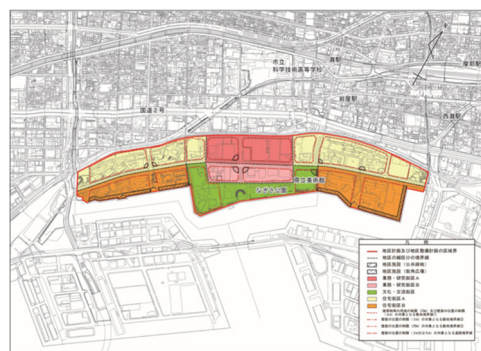


図1 HAT 神戸(神戸新都心地区)⁽²⁾

HAT 神戸は、神戸製鋼等の跡地120ヘクタールを整備したエリアであり、そこに神戸市・都市基盤整備公団(現UR都市機構)・兵庫県による復興公営住宅(賃貸)3,542戸や民間分譲住宅、学校施設、商業施設、防災関係施設(人と防災未来センター、神戸防災庁舎、兵庫県こころのケアセンター、兵庫県災害医療センター等)が建てられた。

(2) HAT 神戸における学習実践

この HAT 神戸という都市空間から、復興を学ぶことをテーマとした学習実践を、筆者が担当する大学の授業カリキュラムの一つとして行った。

授業計画は、①事前説明 (HAT 神戸整備の経緯)、②まち歩き (復興を伝えていると感じるモノや場所の写真撮影とその解説)、③授業内での共有、④全体の振り返り、という内容であった。授業は、2024 年～2025 年度にかけて 4 回実施した。

復興まち歩きにおいて、復興として取り上げられた対象は、街路・住まい・建物・遊具・モニュメント等であった。以下では、それらが示す記憶の要素や、それらが復興のどのような側面を表すものなのかを整理する。ここでは、授業内の個人の意見や個人情報とは扱わず、代表的な事例についての観察結果を述べる。写真等も著者が撮影したものである。

(3) 復興の記憶の「場」の特徴

①日常に溶け込む災害の記憶

HAT 神戸南側の海沿いにある「なぎさ公園」の遊具の一つに阪神・淡路大震災が起きた時刻 (5 時 46 分) を示す時計がある (図 2)。遊具には阪神・淡路大震災を説明するような掲示等はなく、意匠として阪神・淡路大震災が起きた時刻が刻まれているのみである。一般的な震災学習では見過ごされがちであるにもかかわらず、復興まち歩きでは常に取り上げられる事例である。

②新しく生まれたまちとそこに暮らす人々

震災後に新たに整備された HAT 神戸は、道路や歩道が広く、無電柱化され、復興公営住宅が整然と並ぶ景観となっている (図 3)。ここには木造住宅はなく、人通りは少なくにぎわいはみられない。空が広がり、六甲山に視線が抜ける、計画された空間となっている。復興公営住宅には、高層住宅もある。建設直後は震災により被災した人々が居住者の多数を占めたが、高齢化による世代交代が進み、現在では震災を知らない人々も多い。

③防災のシンボル・震災関連オブジェ群

HAT 神戸には、阪神・淡路大震災の展示を行う「人と防災未来センター」を始めとして、防災に取り組む様々な機関がある。第二次世界大戦と阪神・淡路大震災という二度の火災からまちを守った「防火壁」、倒壊した阪神高速道路の橋脚などの多様な震災オブジェ群がある。

④文化の復興とパブリック・アート

阪神・淡路大震災からの「文化の復興」のシンボルとして、2002 年 4 月に兵庫県立美術館が開設された。2010 年には兵庫県立美術館から王子動物園に至る 1.2km の道がミュージアムロードと命名され、沿道にさまざまなパブリック・アートが設置されている。震災から 20 年目には、困難や葛藤を抱えながらも日々を乗り越えてきた人々への思いと、過去と現在を見つめ、未来を見守る存在という思いを込めた^③ヤノベケンジ氏による少女像《Sun Sister》が建てられた。



図2 なぎさ公園の遊具



図3 HAT 神戸の景観

(4) 復興の記憶の場に関する考察

以上に述べたのは、HAT 神戸から想起される「復興の記憶」である。都市計画・住まい・防災・文化が交差する都市空間は、復興に関する多様な記憶の想起につながっている。それらの場の特徴を、ノラの「記憶の場」で示される「物質的」「象徴的」「機能的」な特性から考えてみる。

例えば、5 時 46 分という時間が刻まれた遊具は、「物質的な場」としての震災を伝える要素は限定的である。しかし、震災が起きた時刻を示す「象徴的な場」であり、人々が集い遊べる「機能的な場」である。同様に、新たに整備された都市空間、復興

公営住宅、震災オブジェ群、パブリック・アートは、日常の生活空間として「物質的な場」「機能的な場」であるとともに、そこにしかない独特の空間となっており、震災を経験した人々がいる「象徴的な場」としての意味を持つ。

これらの復興の記憶に共通する、核となる要素は「多様性」と「変化」である。震災後に新しく生まれた都市空間は、時間の経過とともに建物が増減し、店舗も入れ替わる。住む人々も入れ替わる。このことは、復興が完成したものではなく、進化し続けるものであるという学びを提供する。

ただし、復興の記憶は日常に埋め込まれていることから、見て・考えるだけでは学びを得ることは難しい。地域と連携して都市空間全体を活用し、復興に至る経緯を含め学ぶことのできる教育カリキュラムが必要になる。

4. 復興教育の提案

以上に述べた事例を踏まえて、最後に防災教育と復興教育の接点や相違点を災害からの時間軸に基づいて検討する。防災教育は災害を基軸として、震災が起こる前の状況と震災後を対比させることにより、備えることや、命を守ることを伝える。これに対して復興教育は現在に基軸を置き、震災から現在に至るプロセスを学ぶものである(図4参照)。

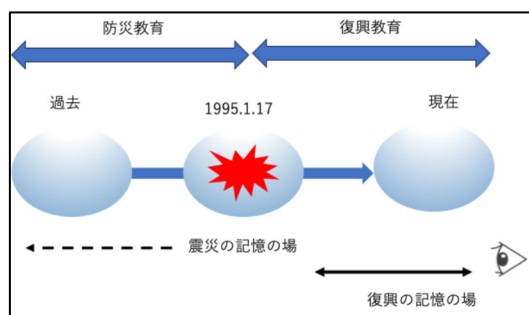


図4 「防災教育」と「復興教育」

復興教育の構成としては、①震災—②被災後の暮らし—③まち・くらしの再構築—④復興の記憶継承という4層が考えられる。防災教育に復興教育を接

合させることにより、過去・震災・現在という継続した時間の流れとして学習を展開できる。

なお、本研究で取り上げた HAT 神戸は計画的に都市が整備された都市部の事例であり、地方都市や中山間地、沿岸部の漁村とは状況が異なる。このような人口の規模や復興のスケールの相違を含めた復興の記憶の相違については、今後さらに研究を深めていきたい。

補注

- (1) 文部科学省による「復興教育支援事業」。2011 年~12 年にかけて実施され 2011 年に 54 団体、2012 年に 16 団体が採択された。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/06/19/1322286_s_2.pdf (2025-8-30)
- (2) 「神戸市東部新都心地区計画」より
https://www.city.kobe.lg.jp/documents/27871/29_tobushintoshin.pdf (2025-8-30)
- (3) Art Tourism, ヤノベケンジ《Sun Sister (サン・シスター)》神戸の未来を見つめる“なぎさ”ちゃんに会いに行こう (3 月 13 日更新)。[https://www.art-tourism.jp/article/sun-sister\(2025-8-15\)](https://www.art-tourism.jp/article/sun-sister(2025-8-15))

参考文献

- (1) 文部科学省 (1998), 学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開。
- (2) 神戸市教育委員会 (1996), 神戸の教育の再生と創造への歩み: 阪神・淡路大震災。
- (3) 阪本真由美(2022), 災害の記録と記憶—何が語り継がれるのか、(松岡俊二, 阪本真由美, 寿楽浩太, 寺本剛, 秋光信佳, 未来へ繋ぐ災害対策—科学と政治と社会の協働のために), 有斐閣, pp.183-210.
- (4) 岩手県教育委員会(令和2年), いきる かかわる そなえる (改訂版)。
- (5) 岩手県教育委員会(2012), 「いわての復興教育」プログラム。
- (6) 鈴木久米男, 麦倉哲, 菊池洋(2023), いわたの復興教育の実践状況に関する現状と課題 - 小学校や中学校, 高等学校への調査を踏まえて -, 岩手大学大学院教育学研究科研究年報, 第2巻, pp.27-38.
- (7) 小野靖子, 鈴木久米男, 佐藤進(2024), 「いわての復興教育」の再考—人材育成及び防災の「警鐘・継承」をめざして, 岩手大学大学院教育学研究科研究年報, 第8巻, pp17-33.
- (8) ピエール＝ノラ編 (谷川稔監訳), 記憶の場 第1巻 対立: フランス国民意識の文化＝社会史, 岩波書店, 2002.
- (9) 山名淳, 記憶と想起の教育学: メモリー・ペダゴジー, 教育哲学からのアプローチ, 勁草書房, 2022.
- (10) 神戸市都市計画局計画部アーバンデザイン室・都市基盤整備公団関西支社市街地整備第1部(作成年不明), 東部副都心計画 HAT KOBE.